

〈調査報告〉

与論島の生物文化多様性－菊秀史さんのお話から

盛口 満

要 約

隆起サンゴ礁を起源とする低島に区分される与論島は、高島に比べ自然資源が限られている。しかし、だからこそ、持続可能な自然利用を探る上でのヒントが、往時の自然利用に見出せるかもしれない。そうした問題意識を持ち、与論島の自然利用に詳しい菊秀史さんから、聞き取りを行った。

キーワード：与論島、生物文化多様性、琉球列島

はじめに

私たちの生活は生物多様性の恩恵によって支えられてきた。1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された地球サミットにおける生物多様性条約締結、および2010年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議以降、徐々に、生物多様性の保全は地球全体にかかわる重要な課題として広く認識されるようになってきている。

地域には、それぞれ固有の生物多様性が存在するが、人々は、その地の生物多様性を基に、地域固有の文化を生み出すことで、その地で暮らしてきた。また、そうした人々の暮らしは、地域の生物多様性に大きな影響を与えることにもなった。このように生物多様性と文化の相互の関わり合いの結果生み出されたのが、生物文化多様性である（今村ほか 2011）。

琉球列島の島々は、日本の中でも生物多様性の高い地域として知られている。また、例えば2010年にユネスコによって出版された『危機に瀕する言語の世界地図』（第三版）には、日本で話されている言語のうち、琉球列島で話されてきた6つものコトバ（奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語）が含まれている（大西ほか 2016）ように、文化多様性の中の言語多様性を取り上げた場合でも、この地域の多様度は極めて高い。すなわち、琉球列島は極めて豊かな生物文化多様性が見られる地域であることが予測されうる。ところが、琉球列島の人々の暮らしと産業、特に第一次産業の在り方は、1960年代以降、大きな変化を遂げることとなった。それに伴い、いわゆる里山と呼ばれる、人々に最も近い存在であった自然の在り様も大きく変わってきた（盛口 2019）。島々に固有の生物文化多様性は、その重要性が認識されるのと機を同一にして、急速に失われていったのである。

著者もその一員である人間文化研究機構総合地球環境学研究所のLINKAGE（リンケージ）プロジェクト・生存基盤ユニット（ユニット・リーダー：高橋そよ）では、共同研究のフィールドの一つを、与論島に設定をした。これは隆起サンゴ礁からなる低島において、限られた自然資源をどのように利用してきたのかを探ることから、持続可能な自然との関わり方のヒントを見出せな

いかと考えるからである。生存基盤ユニットによる、島の人との協働による与論島の古写真展が開催された折、与論民俗村の菊秀史さんから、与論島の生物文化多様性に関わるお話を聞かせていただく機会を得た(2022年6月26日)。菊さんは『与論方言辞典』の著者である菊千代さんの御子息にあたり、与論島の自然・文化に造詣が深い。なお、聞き取りにあたっては、沖縄大学地域研究所特別研究員の当山昌直さんにも同席していただいた。

1. 聞き書き

バナナはバシャといいます、バナナの葉はハシャンバといいます。こうした方言だけでなく、いいまわしなども記録しておきたいと考えています。例えばカエルはガークといいます、よくしゃべるおばちゃんのことガークといたりします。珍しい人が来たというときは、ウマノチヌムティのよう……といたり。これは馬の角という意味です。馬の角のように珍しいということですね。雄の牛をウグトウイといいます、えらそうな男性がいます、「ウグトウイになるな」といたり。方言調査のときに、共通語の例文をあげて、これを方言で何と呼びますかと聞く調査がありますが、これも注意をしないと、共通語に方言がひきずられることがあります。方言でどういうかというのを先にして、それは共通語ではどういう意味なのかという順番で考える必要があると思います。夏至の頃はヤギの尻尾のように日が短いなんていう、いいまわしもしました。

イヤプジというのはお盆のことですが、そのお盆のときにアダンの実を供えます。お盆のウークイ(注1)の日に、供えたものは先祖が持って帰るのですが、そのとき浮遊霊が奪いに来ると言います。アダンの実をバラバラにしたものをチーといいます、そのチーをちぎってなげて、この浮遊霊を追い払います。だからチーは鉄砲の弾だよと教わりました。お盆のときにお供えするキビのほうは、先祖が天秤としてお供えを持って帰るのに使ったり、杖にして使うと言っていました。お盆のときに、イヤプジヤブリといって、天気が崩れることがあります。すると、お盆に使う魚を捕りに行った人が、たまに遭難したりするわけです。イヤプジヤブリは、竜宮の神と祖先の神の仲が悪いせいで起こると言っていました。先祖には、一杯お供えがされるので、竜宮神が嫉妬するせいだと(注2)。

サーラキ(サルカケミカン)のつるはムイ……赤ん坊のゆりかごを作るのに使います。サーラキのつるに竹をあてて作るんです。サーラキの葉は、ナーチキヨイ(注3)のときに、赤ん坊を祓うおまじないにも使います。モンパノキは水中眼鏡の枠を作りますが、これはハマビワで作ったもののほうが上等です。ハマゴウは蚊取り線香がわりですね。カタバミはシーといって、10円玉を磨くこともできます。これは観光客にもやってもらっていますよ。トベラは葉っぱの三分の一を切ってから、水に浮かべると、油が出てすーっと進むので、舟だよといって遊びました。イチゴはイチュンビといいます。イノコズチのように人の体につく草は3種類ほどありますが、みんなサシとよびます。オヒシバはシツピグサです。抜けにくいから、しぶとい草という意味です。ハイキビは畑に生えたらやっかいな雑草ですが、田んぼの畔がくずれないようにするためには、ハイキビがいいんです。ヤブニッケイの若葉は丸めて笛にしました。種はろうそくの原料にしたそうです(注4)。私は見たことがありませんが、母がそう言っていました。ソテツの針をさして、独楽にしたりもします。ヤブニッケイの葉は砂糖とかを掬うときのさじ代わりにします。香りもいいです。ヤブニッケイは薪にすると、葉っぱがパチパチと音を立てて燃えるので、気をつけると言っていました。センダンの材は船の煙草入れの枕を作ります。モッコクは与論にはありません。イシクラゲはヤマオーサ。祖母が食べられると聞いていたので一度、食べたけど、まった

く消化しなかったという話を聞いたことがあります。ヤマモモはありませんでしたが、小さな実のモモはありました。オオバコは学校のウサギの餌です。ノグシは鶏の餌ですね。パンシルーは食べすぎて、便がでなくなって難儀しました。みんなやっているんじゃないでしょうか(注5)。—大きな竹とかはありましたか？

大きな竹はないですよ。ほとんどはホウライチクです。あとリュウキュウチクでチニブ(注6)を作っていました。小さいころまでありました。少ないが大きいリュウキュウチクは島にもありました。リュウキュウチクは島のものだけでなく、ヤンバルからも持ってきました。機織りのニギチミ(糸巻き管)というところもリュウキュウチクを使います。竹を壁に使うときは丸のままです。タケをつぶしてつかうときもあります。この、きれいに竹をつぶす技術を身に着けたいと思うんです。ほかにも、タカラガイを網の錘に使っていましたが、タカラガイの縁だけ残して、殻を割る技術とか。昔の漁師さんはみんなできたはずですが、こうした技術が今に伝わっていません。去年かおとし、アマンジョー(注7)のところで、シャコガイの錘を見つけたんです。人がキレイに穴をあけたものです。転がっていたんですが、通りかかっても、みんな気づいていなかったんです。私はすぐに、これはと思って拾い上げたんですが。

弟は、クワズイモを鎌で切って、その汁が眼に入ってえらい目にありました。えらく苦しんだんです。弟が黄疸でたときは、腎臓が悪いと言われて、オオイタビとフナを料理して食べさせるというのがありましたね。母が作っていました。1キロ先に池があって、フナを養殖していたので。

私が小さいとき、シークワサーがたくさんなる家があって。そのおじさんは篤農家で。ある日、おじさんは畑にいているだろうと、どうどうと門から入って、シークワサーの木に登って、食べて、お土産にポケットにつめこんでいたら、木の下から声が聞こえたんです。家にいたんですね。顔をみられたらまずいと木から飛び降りたんですが、木の下に尖った切り株があって足に刺さりました。片足で逃げて、しばらくして振り返ったら誰も追ってきていない。そこで食べたものを吐いてしまいました。それから足にささったものをぬいて、イモ畑でイモの葉をちぎってもんでつけて、ススキの葉っぱを包帯にして家に戻ったんです。家で寝ていたら、何も言わなくても、なんかあったと母親はわかるんですね。

—かつては豚便所だったのでしょか？ ウジ殺しの植物などは利用していましたか？

トイレの脇に便槽があって、豚小屋がその隣にありました。豚のフンも人と同じ便槽に入れました。ウジ殺しやニオイ消しの植物の記憶はありません。

テーチキダムヌというのは最初に火をつけるときに使う薪のことです。ソテツの葉っぱとかを使いました。葉っぱの薪はパーダムヌ、木の薪はシダムヌです(注8)。隣近所の子供たちでタキムヌ採りに行って、藪の中のどこに鳥の巣があるとか、あそこにある木は何に使えるとか見るわけです。で、父親が農具の柄を新しくしたいと言ったら、あそこにあの木があると。何がどこにあるか知っていたわけです。だから現代版の家事手伝いは大事だと思います。小さいときの体験が、今、生きていますから。薪がかまどの中でつかえてよく燃えなくなった時、空気の通りをよくするために火箸でかまどの中をかきまぜます。このときに使う言葉がピナタグユンという動詞なんです。こういう動詞も忘れ去られてしまっています。薪を使った煮炊きをする、鍋の底にすすがつかますが、すす落としに使ったのはオオベッコウガサの殻です。これでこそぎおとします。軽石も使いましたよ。与論では1963年にプロパンガスを使い始めた人がいます。それから薪が徐々に使われなくなって。ただし昭和40年代になっても五右衛門ぶろを使っている人はいたので、昭和40年代中ごろまでは薪を使う人はいたと思います。

戦時中もイモをたくさん作っていました。戦時中は茅葺屋根の家は解体して、日中は洞窟に潜んでいました。頃合いを見て、母と祖母が家に戻ってご飯を作って洞窟に戻って食べました。畑は月明かりの晩に収穫したと言っていました。歴史は、何年にこんな事件があったというより。こうした生活史を教えたほうがいいと思います。

ソテツはいろいろ利用しました。野菜の苗の暴風垣にしたり、葉っぱを敷いて、つるものを這わせたり。ソテツの実で笛も独楽も作りました。マガキガイでも独楽は作りましたよ。

—漂着物の利用について教えてください。

流木は持ち込むなど言っていました。霊がついているからと。ヤシの実のはひしゃくにしました。ひしゃくをニブというので、ヤシニブとっていました。ヤシの実の中を割って食べたことはありますが、おいしいもじゃありません。皮をはぐのが大変でした。おいしくなかったのは、新鮮じゃなかったからかもしれませんが。

—二枚貝はこのあたりにいましたか？

二枚貝はいないんですね。アマオブネの仲間は小さいとき、採ってよく食べました。ソテツの針で身を取って食べましたよ。タカラガイも食べました。両手に一つずつもって、それをぶつけて殻を割って。海の生き物の方言も、例えばミノカサゴはミヨオといいますが、こうした名前を知っている人もほとんどいなくなりました。知らないカニは毒があるかもしれないから食べられないよと言っていました。ナマコはみんな食べられるよともいいました。ガンガゼはユン、シラヒゲウニはガシチ、普通のウニはウンバミ。パイプウニはアージンユンといえます。アージンユンというのはパイプウニの棘が杵に似ているからです。

—カタツムリの殻を突き合わせる遊びはしましたか？

やったような気はしますが、つまらないからあまりやらなかったですね。日常的な遊びではないですね。アフリカマイマイも食べたことはありません。やはり毒ですから。タニシは食べたことがあると母が言っていました。

セミとりにはサネン(ゲットウ)のはっぱをラッパのような形にしたものを使いましたが、ジョロウグモの巣も使いました。

昭和37(1962)年まで、うちでは米をつくっていました。牛を使って鋤を曳いたので、牛を使うときの掛け声を、今でも覚えていますよ。とまれはター、左はハガイ、足をあげろはチミ、下がれはシジューとか。こういう掛け声も、覚えている人はほとんどいなくなったんじゃないでしょうか。

庭のことを沖縄ではなんといいますか？ ここではヤンメー……家の前と呼びます。人によってはアマダイということもあります。軒はユールイです。菜園はアタイです。ガジマルを植えるとアタイの妨げになるといっていました。台風が来る前に、ススキの束を作って、根を上にして葉っぱを下にして、屋根のてっぺんにかぶせます。そして上から輪をかけておさえます。これをイーグシというんですが、これはエボシという意味じゃないかと思います。語源が何かというのはおもしろいことですね。地名もそうです。海岸沿いにビドウというところがありますね。沖縄に辺戸というところがあるでしょう。これともとは同じ語源なんです。もともとはビドゥで、これに尾道という漢字をあてたので、そのうちビドウと呼ぶようになったわけです。もとは辺鄙なところという意味なんです。トゥーシというところがありますが、これはトゥールイシ……通る石が語源です。岩に穴が開いていて、中を人が通り抜けられたと。同じようにトゥイシという地名もあります。トゥールイシがトゥーシやトゥイシに変わったわけです。

とても、すごくという意味の言葉がたくさんあるんです。シッカイ、カッティ、ダッタ……と。少しずつニュアンスも違うんです。でも、今はそのうちの限られたものしか使わなくなって。言葉が減ってきてしまっています。観光客がここに来て、藁ぶき屋根をみて「かわいい」と言ったりします。本来の「かわいい」の意味からはずれて、なんでも「かわいい」と言ってしまうんです。与論の言葉も、使われない言葉が増えてきているんです。

—そういえば、以前、ある民俗学研究者から、妖怪も、メジャーな妖怪が生まれると、マイナーな妖怪の特性が、みな、そのメジャーな妖怪に吸収されてしまうという話を聞いたことがあります。

与論にはたくさんの動物霊がいましたから。ヤギムヌ、ウシムヌ、ウワムヌと。ヤギムヌは口笛を吹いて人を誘い出すといます。また、夜に口笛を吹くとヤギムヌを呼び寄せるから、口笛を吹いてはいけないとっていました(注9)。ウワムヌは子豚が股の間をくぐると死んでしまうと。だからワムヌがでたら枝を脇に立てて、そっちをくぐらせると。幼稚園児のころ、家の近くで牛の霊を見たことがあります。父と弟と三人で田んぼから帰るときのことです。木立の中の道だったんです。途中、動物が死んだら埋める場所がありました。大きな岩があって、そのわきに埋めたんです。夜、その岩の上にヤギがたっていたりするといわれています。昼間は父親と一緒に歩いたりするのでいいのですが、一人だったら、ダッシュで通り抜けるようなところでした。夕刻、3人でその場所を歩いていたんです。弟、父、それから4、5メートル離れて私が歩いていて。後ろから何かがかかる心配がして、振り返ると牛がいるんです。“牛だー”って、親父のところへ行っただけがみつきました。そのわきを牛はさっさと通り過ぎたんですが、見ると脚がない牛なんです。父は「まっすぐ歩け、まっすぐ歩け」と。牛がUターンしてくるんじゃないかと気が気じゃなかったんですが。今だったら迷信だというでしょうけど、そういうことがありました。そういうことに会おう場所があって、そういう場所で唾を吐いたり小便をするものじゃないよといわれていました。それと、雷にむかって悪口を言うと雷に打たれるよーとも言っていました。墓にむかって指さすなとかもいいました。のどに魚の骨がささったら、お椀に水をはって、お椀の上に箸を十字において、その四方から息をふきかけてから、お椀の水を一息でぐっと飲むと骨が取れるとも言っていました。夏の暑い日、子供は海に行きますよね。今だったら熱中症に注意しなさいというところですが、昔は違う言い方をしました。夏の昼下がりムヌが出歩くからと子供たちが出歩くのをいさめたんです。与論にはイシャトウという妖怪もいます(注10)。これはタコやスイジガイをいやがるといっていました。そうそう、近所に大きなガジマルの木がありました。兄が中学生の頃、夢遊病みたいになって、夜中に一人で雨戸をあけて、この木の下で寝ていたことがあるんです。これはムヌにたぶらかされたといっって、一週間、マダライモガイを、魔除けといっってガジマルの根っこに打ち込んだということがありました。祖父は、夜中は、よく霊が襲いに来ると言っって、枕元に斧や鋸、指金を置いていました。指金が一番強いと言っっていましたね。霊にこれで首を切るぞーと言っって。

今は観察する生活がなくなっってしまいました。体験的なものがなくなっってしまいました。代わりにバーチャルな世界です。戦後は車のタイヤから繊維を取り出して使ったり、飛行機の燃料タンクを舟や水甕替わりにしたり。この船はすぐにひっくり返りましたが。昔はなんでも応用しようという発想があっったんですね。民俗村では観光客に、いろいろ体験をしてもらおうとやっっています。カタバミで10円玉を磨くとか。カタバミを見せるとクローバーという人が多いんです。なので、クローバーとの違いも教えて。

2. 考察

菊さんにうかがった話の中で、今回、特に注目したいと考えているのは、妖怪に関する話である。低島である与論島は、崖や海岸の石灰岩地などを除き、ほぼ全島的に農耕地として利用されていた。そのような人為の影響が自然に強く及ぼされていた島においても、妖怪という「人の手には負えぬもの」の出没が見られたという話であるからだ。

与論島における妖怪との遭遇は、菊さんの話にあるように、農耕地と住居を結ぶ道上という極めて日常的な空間でのことである一方、夕刻時という特殊な時間帯での出来事であった。かつて照明の手段が限られていた時代、夜間は闇という自然が圧倒的に覆いつくす時間帯であり、夕刻は夜間への移行帯、境界線上の時間だった。また、与論に出没する妖怪たちの中に、ヤギ、ウシ、ブタといった家畜が変化したものが複数含まれていることにも注目したい。これは、人とのかわりが極めて近いながらも、家畜には、人間にはうかがい知れない領域を含む存在であると思われるということの意味するだろう。家畜もまた、人と自然の境界線上の存在であるわけだ。与論島における妖怪の存在は、人為があまねく自然を改変していると思えるような環境においてもなお、自然が主導権を握っている領域があるということが人々に意識化されていたことの証のように思える。

自然には、人がとらえきれない領域がある。と同時に、自然を人がどのようにとらえるのかも多面的だ。

例えば注に示したように、与論島ではきわめて多様な薪を表す用語があった。これは、まとまった森林のない低島において、燃料の確保は日常的に重要課題であったからだ。と、同時に、薪を表す多様な用語の存在は、天然資源を十全に利用するために、自然物に対してできるだけ多様な用途を見出そうというまなざしが存在していた結果ではなかろうか。ひいては、このようなまなざしが、妖怪の誕生にも関わっているように思える。この点については、今後、より深く考察を行いたいと考えている。

参考文献

- 今村彰生ほか(2011)「生物文化多様性とは何か」 湯本貴和編『環境史とは何か』文一総合出版、pp.55-73
- 大西正幸ほか(2016)「奥・やんばるの“コトバ・暮らし・生き物環”」大西正幸ほか編『シークワサーの知恵』京都大学学術出版会、pp.1-25
- 菊千代・高橋俊三(2005)『与論方言辞典』武蔵野書院
- 盛口満(2019)『琉球列島の里山誌』東京大学出版会

注

注1・ワークイ：「御送り。法事するとき霊を送ること」(『与論方言辞典』)

注2・イヤープジャブリ：「お盆の頃に天気が悪くなること。ウヤカミ(祖先神)とリュウダヌカミ(竜宮の神)は仲が悪いので、海の幸を祖先神に供えさせないように、海神が悪天候にするといわれる」(『与論方言辞典』)

注3・ナーチキヨイ：「名付け祝い。襲名祝い。生れた赤児に親祖先の童名を襲名する意の祝い。生れた日か、その翌日にするのが普通である」(『与論方言辞典』)

注4・『燈用植物』（深津正 1983 法政大学出版局）によると、かつては出雲などでもヤブニッケイの種子から脂肪分を取り出し蠟燭としたという。これは「こが蠟」とよばれていた。ただし「こが蠟」は融点が低く、また匂いも悪かったので良質な蠟燭ではなかったともある。

注5・『与論方言辞典』によると、それぞれの方言名は以下のようなものである。シダラキ（ヤブニッケイ）、イク（モッコク）、ノーダギ（ハイキビ）、シンダンギー（センダン）、トゥイユ（ハルノゲシ）。

注6・チニブ:「ヤマグンダイ（リュウキュウチク）を割り、平たく組んだもの。壁や天井に張った」（『与論方言辞典』）

注7・アマンジョー:「(地) アマミ川。大字麦屋に属する小字地名」（『与論方言辞典』）で、アマンジョーにある井戸（アマンジョーゴ）は、「与論島に初めて上陸した人々が、この井戸の湧き水を使用したといわれている」。

注8・『与論方言辞典』によると、与論島では以下のように、薪に多様な呼び名が付けられていたことがわかる。

アシクダムヌ（くろいげの薪）、オーダムヌ、ナマダムヌ（生の薪）、ギシキヌパーダムヌ（茅の薪）、ショーガリダムヌ（よく枯れた薪）、サタタキダムヌ（砂糖製造用たきぎ）、パーダムヌ（葉の薪）、フギガラダムヌ（きびがらの薪）、ワイダムヌ（割ってある薪）、クワーナシダムヌ（出産に備えて準備するたきぎ）、マチギダムヌ（松薪）、テーチキダムヌ（焚き付け）、ムンジャラダムヌ（麦殻の薪）

注9・「与論にはまた山羊のムヌというのもいるらしい。これも何しに出てくるのかはっきりした目的もないのに夜道に飛び出してきて人に見られるらしい。こんなものを見たときは黙って知らないふりをして通らないと禍いがあるという。（中略）びっくりして声を挙げたり、「山羊が」とか「どこの山羊だろう」などといっではいけない。連れの者が物を言っても、これに返事をしてもいけない。返事をする人に災難がかかるという」（『奄美の民俗』 田畑英勝 1976 法政大学出版局）

注10・イシャトウ:「妖怪の一つ。想像上の動物で本土でカッパといわれるものに似ている。[類語] ハタバギマンジャイ。アコウ樹などの大木に宿るものと、岩に宿るものがある。夜になると海に出る。（中略）体は小さい子供の形でクバ笠風の笠をかぶり、一本足である。」（『与論方言辞典』）

Biocultural diversity of Yoron-Island – From story of Mr. Hidenori Kiku.

Mitsuru MORIGUCHI

Key word: biocultural diversity, Yoron-Island, Ryukyu Archipelago